

護神と化してから男性化せられ、修羅と闘ふと言はれてゐる。修羅の中變化生の修羅になると、世界を持受するの力があり、物に畏るゝ所なく、よく梵天や帝釋及び四天王とその權力を争ふと、印度教傳來の所説がある。觀音は難伏三昧を修して示現し、以權顯實の大法利益を振ふのである。「自在天」。他化自在天の略で欲界 (Kāmadhātu) の頂主である。他の所作を假りて以て己が樂となす魔王である。自我主義のものである。觀音は赤色三昧即ち中道智光を以て、應じて魔王の爲に魔界を佛界となすのである。大自在天。摩醯首羅天 (Mahesvara) の釋名である。是は濕婆神 (Śhiva) の異稱

て印度婆羅門教徒に尊敬せられ、六派哲學時代に於ては此濕婆神は世界の本體であつて、一切萬物の造化主である。と信じ、吾人の享受する苦樂昇沈の果報は悉く此の神の意志から出るものであるとせられてゐた。八臂三目の怪神で、白牛に騎り、白拂を採つて、大威神力を振ふ。そして四禪天或は初禪天或は第六天に住し、是を支配してゐると言はれてゐる。印度教のこの神は、四臂三目で、下手は兩方、天地の印をかたどり、左手に馬を右手に寶槌を捧げてゐる像がある。法華私註には、阿迦尼陀天と稱すと註してある。そして華嚴經には、是を色空竟と譯してゐる。色界 (Rūpadhātu) の主

である。「天大將軍」梵語の鳩摩羅或は拘摩羅(Kumara)の釋で童子といふことである。八歳以上の未婚者の稱である。また詳しくは究摩羅浮多(Kumaraputra)ともいふ。童といふのは元來牛羊に角なく山に草木なきをいふので更に菩薩を童子と稱ふこともある。是は法王子なるが爲であるとも眞常を悟りて心に愛染なき未婚少童の如きが故に依るともいふ。今是を更に天大將軍といふのは科註法華經のその解釋に次の如く註が施してある。是によると「光明中即以散脂爲大將大經曰(大涅槃經)八健是天中力士也」とある。即ち此の將軍は勇量を表明するのでその像にも鶏を撃げ鐸

を持つて更に赤幡を掲げてゐる魔神の姿をなしてゐる。「毘沙門」四天王の一王で身長サ半由旬壽五百才婆娑世界を去る四萬由旬の須彌山の中腹北方の天を守護してゐる。護世四天王の一人である。三十三天の主である。帝釋天の外臣である。その宮殿は第四層北水精宮で部屬は夜叉羅刹である。福德を支配する神として聞えてゐる。梵語では鞞舍羅婆拏(Vishvadeva)で之を毘沙門又は毘捨門と音寫する。遍聞多聞普聞と譯する。婆羅門教徒の信仰した毘沙門は是を財神とし金銀寶玉の守護神となし三頭三腕八齒を具し耳に一の環があり碧眼で身體恰も癩病者の如くて

ある。日本では、武勇の神の如くに思惟し、専ら勇健なる神像を作つてゐる。西藏像によると獅子王に乗り、寶蓋を持ち、怪獸を挟み、勇猛剛健の氣を表してゐる。

「小王。」天王を大王とし、是に對して人王を小王といふのである。「長者。」人に長たるの徳を有する人をいふので、法華第十譬喻品にもある。

私解。

觀世音は身に意に應化の爲に勞する事をゆめ厭はない。されば梵王の身を以て度すべきには梵王身を現じ、その他帝釋、天自在、天、大自在、天、天、大將軍、毘沙門、小王、長者と、各々以て濟度すべきが爲には、各々その機に應じ自在に、その身を示現するのである。

應以居士身得度者即現居士身而爲說法。應以宰官身得度者即現宰官身而爲說法。應以比丘比丘尼優婆塞優婆夷身得度者即現比丘比丘尼優婆塞優婆夷身而爲說法。

私註。「居士。」法華經科註には「居道居山居財之士」とあるが、故事々苑によると、凡具四徳、乃稱居士。一不求仕官、二寡欲、三居財、四守道、自悟」とある。更に菩薩行經には「有居財之士、居家之士、居法之士、居朝居山之士、通名居士也」とある。要するに、人道を踏む現今の眞の紳士の謂である。現今では居士といふと、在俗にして佛道を修業する人の様に言はれてゐる。「宰官。」宰は主で

ある官は管てある。主宰、管領の義で、勳業あり國務を輔佐するもので、官人の謂である。「婆羅門」梵語にて (Brahmana) の音寫で、茲に淨行と譯する。印度の族稱名で、四姓階級中の最上族に位し、僧侶學者の階級である。その傳説によると、上古梵天 (Brahman) の口から出た淨族で、國土武士の族である刹帝利 (Kshatriya) よりも一段上位を占め、諸天 (Deva) 諸神 (Devi) の聖意を傳ふる聖族であると認められ、從つて其の全生涯には、嚴重なる教規があり、四吠陀、十八大經等の經論理學を學修し、家庭を作つた後、一定の義を経ると出家し、山林に入りて梵行を修するのである。彼等の學修する經典は主と

して四吠陀 (Veda) 優婆尼沙土 (Upanishad) 等で、佛教以前の印度の教義である、そして是等は自然的趣味から出た信仰に基く詩的經典で、大體は梵天即ち婆羅門族の根本生神を世界の主體として、梵天國を理想的世界として、苦行觀行によりて、一切の無明を除き、その世界を證得せむといふのである。科註法華經には面白い註が入れてある「林野自閑、隱逸、肥遁、坐乾、仙人通稱也」と。「比丘」梵語 (Bhikṣu) 苾芻、僧侶といふこと。正しくは淨乞食と譯される。上は法を乞ひ、惠命を資け、下は食を乞ふて體養を資くるのである。是をその修道の上から、怖魔又は破魔ともいふ。發心から成道に到るま

て魔と戦ひ、その眷族を殺すから魔が怖れる。又見惑思惑八十八使の煩惱の邪惡を破斷するのであるからかく名づけたのである。「比丘尼」女入道の僧をいひ (Bhikṣuṇī) といふ梵語の音寫である。茲に乞女士勤事女といひ四衆の一である。佛教の説によると此比丘尼の起滿は、佛在世の時、その姨母摩訶波闍波提 (Mahāprajāpatī) を出家せしめたのに依ると言はれてゐる。

「優婆塞」譯し近事男といふ、三歸五戒をうけ、是に堪え忍びて、且つ佛法僧の三寶に奉事し近親するが故である。梵語では (Upāsaka) 七衆の一である。「優婆夷」近事女と譯し、又近善女とも譯する。在家の女で、受戒

三寶の近事するので、又近住女ともいふ。一般に佛教信女をいつて、七衆の中にある。梵語は (Upāsikā) である。科註法華經には、是れ等二者を清信男女と註してある。あるのは、意を盡したる翻譯である。

應以長者居士宰官婆羅門婦女身得度者即現婦女身而爲說法
應以童男童女身得度者即現童男童女身而爲說法應以天龍夜
及乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者即
現之而爲說法應以執金剛神得度者即現執金剛神而爲說法。
私註。「婦女」法華妙音品に菩薩が王の後宮に女身に變じて

說法をしたといふ記事がある。補所の觀音は女身の
示現をする事は易々たるものである。茲に於て特に

注意すべきは、婦女身を示現して何をか説法するといふ事である。即ち婦人は愛欲執着の結晶體である、その中に現身して先づ法を説くのである、大乘眞實の法を説くのであるから、無相一乘法を説くのである。すると男とか女とかいふ問題よりも、唯有一乗の法といふ大問題にのみ主きがおかれる。婦女といふ觀念と離れて、求法の一人となる。大法の上に、婦人男子の別あるなく、唯示現の身體に男女の別が初めて存することとなる。唯一文字の婦女といふ字に關しても、注意をせなくてはならぬ。「天龍」天龍に八大龍王あり。一難陀龍王(歡喜)二跋難陀(善歡喜)是は兄弟で常に摩訶

陀國(Mi-garha)にゐる。三沙羯羅(鹹海王)四和修吉(多頭九頭龍)五徳又迦現毒多(舌六阿那婆達多)無惱(七摩耶斯龍王)大身大力(八優鉢羅)黛色蓮華(是である)神變不思議の龍神で龍者の王である。是等龍を通じて四種あり、一は天宮殿を守り、二は雷を興し雨を致すもので三は地龍である、即江河を開決する者である、四は矢藏龍で輪主の寶藏を守護する者であると言はれてゐる。「乾闥婆」梵語では(Gandharva)といひ、尋香、食香又は嗅香といひ、八部衆の一で帝釋の樂神である。須彌山の南面、金剛窟(之)に居り、常に香のみを食し、虚空を飛行してゐる。その像を西藏佛像に見ると、日月を背にし

妙音なる琴を抱き樂童の笛を吹くものを隨へてゐる。
 「迦樓羅」(Garuda)の寫音で揭路茶と記し、茲に金翅鳥又
 は妙翅鳥と譯される。印度の神話にある怪鳥で。一
 説では食吐非苦聲鳥と譯するものである。迦樓羅は
 其形狀鳥類の様で、一切鳥類の王であると傳へられて
 ゐる。須彌山の北方にある大鐵樹に巢ひ、翹翼金色兩
 端相距るる實に三百三十六萬里。日日須彌の四海を
 巡翹して龍を捕へて喰ふ頸に如意珠あり、火口より焰
 々と熾上つてゐる。法華經序品には、大威徳大身大滿
 如意の四種の迦樓羅ある事とが記してあると。「緊那
 羅」。是れに就ては、二説がある。一は乾闥婆の妻女で

あるといふ説と、他は單獨別種の男この樂く神である
 といふのとある。印度では、前説を採つてゐる。梵語で
 は(Kinnara)といひ、印度像で見ると、人面人半身、手は
 人らしく下半部は鳥で羽がある。今は此の説を採り
 度い。後説をとると、人非人と全く混同するので、全體
 の意から推しても、此の前説が當るらしう。「摩睺羅伽」
 二説があつて、羅什三藏は是を地龍であるといひ、肇法
 師は是を腹行の大蟒であると言ふ。梵語は(Makara)で
 肇法師の後説によると、大身鱐魚と譯し、身は白山の如
 く兩眼は日の如く、口は閻谷の如く、能く舟を呑み、海底
 の穴に蟠居すといふ。「人非人」。一説に(Kinnara)の譯で

疑人疑神とも人非人ともいふといふ説もある。是に
よると八部衆の一で歌舞を以て帝釋天に仕へ、その形
は馬首人身人首鳥身等一定せないと。法華科註によ
ると先の緊那羅と天帝の絲竹の樂神であつて、この人
非人といふのは、八部の衆が各々つれて來てゐる所の
家來て之を總結して人非人等といふといふ説である。
「執金剛神。」執金剛は、普通の金剛神 (Vajra deity) 又は金
剛藏王などではなく、金剛手又は金剛密迹天といはれ
てゐる保護神で、手に金剛杵を執つてゐるから、執金剛
といふのである。五百の夜叉を領し、妙高山に居住し
賢劫千佛の間俱に佛法を守護し、如來一切の秘密の事

私解。

跡を識達してゐる。その起源は昔一千二子があつた
その千の兄は佛の所に詣り發心したが、二弟の一人は
千兄が成道したらば、我は魔となり之を惱害せむと發
願し願成就して金剛の大力を有したる夜叉神となつ
た。是が執金剛である。科註法華の註に別説として欲
界色界の天上にありて諸天を教化する大護神である
と。
長者居士宰官波羅門等の婦女の身を現じて説法すべ
きものには即ち婦女の身を現じて爲に説法せられ、又
七八歳の童子を度するには童子の身を現じて説法せ
らる其他天龍夜叉等の八部衆の身を現じて説法すべ

き場合には、その身を現じ、執金剛神の如きものとなりて説法するのがよい場合には、直ちに執金剛神の形を表はして説法するのである。

以上。觀世音は三十三身を現じて、爲に自在に大法を演説し衆生を化導し得るのである。上は佛身より下は人非人執金剛神に到る種々無量の體を現示して、普く一切の國土衆生を利益せむとするのである。

無盡意是觀世音菩薩成就如是功德以種種形遊諸國土度脫衆生。

私註。「種種形。」今上に示現の身を三十三身に擧げ、止めてゐる、けれ共唯に三十三身のみならんや、種々の形を以て

横に十方世界に徧く、豎は三土に通ずるのである。たゞ此の場合三世に通ずることの出來ぬ點を注意せななくては觀普門の義を誤る。何故に三世寂光土を除くのであるか。寂光土は化度すること叶はぬのである。故に觀音の普門示現の程度と範圍とは空間的意味に限定せられてゐることを明確に會得すべきである。されば觀音の示現して利益する所は、一切世間である。そして世間に三種がある。大智度論に依ると、一は衆生世間であつて、五蘊和合の身を有する十界差別の一切衆生の世界である。二は國土世間にて、十界差別の衆生の居住する十界差別の世界である。十界とは、地

獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十て是等の國土を第二とし之には五蘊世間とて十界に於て色受想行識の五蘊が前二世間の體となりて存在する世間て五陰世間の義である。然し是等は悉く一心所作の世界であるから天上より下地獄に到る差別なれど平等の心理を看破すれば唯一心の所造として平等の中に攝められて了ふ。十界化導の菩薩はこの一心を識して隨機應化平等に歸し差別に出て稱々の形を現じて衆生の離苦に盡粹するのである。

私解。

是の節は前述の三十三示現身の説明を纏めた答て惣合である。無盡意よこの觀世音菩薩はこの如く示現

利益の大功德を以て或は佛身に或は執金剛に種々無量と形を變化して十界三世に遊行して衆生を救済するのである。この節はこの一段の惣結末であつて主眼とする所は「以種々形」である。そして是れが又實に此一段及び普門品の主要なる句である。普門の普門なる所以は、この一句に歸納せしめられる。そして「成就功德」といふ一句は普門示現の本躰を説明した言葉で「度脱衆生」とは普門示現の功能を説明したのである。茲に於て種々形を示して諸國土に遊行する目的は度脱衆生であつて、その普門示現してゐるものは、觀世音菩薩功德成就といふ本誓の徳本性の慈悲應化

利益の功德にあるので、此一單句は全體の惣説て且つ惣結である。緊要の語を以て充されてゐる事が解る。惣問に於て無盡意菩薩は、身口意の三業に就き、觀音菩薩の功德を問ふてゐる。普門示現の利益化導の理由が問ふてある。そして答は、この段では唯三十三身を現じ三業利益の状態を述べてゐる而已である。すると緊要なる質義の要點を失する事となる。けれども釋尊説法の妙は最後の一段の結末に於て明確に達意に是に答へてゐられる。それは觀音はこの如くの功德を成就して種々の形を現じ、臨機變化應病施藥巧みに諸國土に遊びて、一切の有象無象の世間衆生を濟度す

るといはれた。如是成就の功德とは實に無盡意菩薩質問の要點である。理由に對するの一針で。觀音が三十身を現じ意を用ひ、口に法を説き濟生利益する所以は、實に此の功德を成就するといふ所にあるので。觀音は此の功德を本體としてゐるから是非共種々の形を示現して能く功德成就の本體を闡明しなくてはならぬのである。此の理由からして示現説法の意を盡するのである。目的とする所は衆生濟度に存すれど觀音普門の本性本能は、茲にありと知るべきものと思はなくてはならぬ。

是故汝等應當一心供養觀世音菩薩是觀世音菩薩摩訶薩於怖

畏急難之中能施無畏是故此娑婆世界皆號之爲施無畏者。

私註。「摩訶薩」(Maha Bodhisattva mahasattva)の義で自利利他の大

心を有する菩薩に對しての稱で法性識了の理解充分の菩薩に附するのである摩訶(Maha)は大の義で又清淨の義にも通ずる。

私解。

是から釋尊は進んで觀音菩薩を供養すべきを勧めらるゝので始めにその功德を説き次に是を供養禮拜すべきことを勧むるは事の順序である。即ち汝等は一心に觀世音菩薩を供養せよ然らば此觀世音菩薩は怖畏急難の中に於て能く無畏を施し給ふそれ故現娑婆世界は皆之を號して施無畏者といふのである。と釋

尊は觀音を更に紹介説明せられた。この節でみると、供養觀世音の果報は施無畏である。故に此節の主眼は供養であるが觀音經として見る時は施無畏の一句である。施無畏は梵語で Mahabodhisattva mahasattva 或は單に mahasattva といひ摩訶薩埵といふから常住恒久不變の法性を識了するの義である。して見ると施無畏といふ事は法性の常住不變の大理を識達する事である。無畏は法界一如の眞理、本體に於ては怖畏なく、難なく急なく緩なく樂なく苦なく一切一實相の當體として唯日は日の如く月は月の如く花は紅にして柳は緑である。その所に於て常住不變の月あり花あり

柳あり、この日月花柳雲の隠すなく風の散らすなく無畏無難であるのである。觀音はこの如くにして此の無畏を衆生に施すのである。然し徹底的に言へば供養する時に於て衆生は觀音と合體不離の一爐中に溶解せられつくし無畏國裡のものとなつてゐる。それ故に無畏者の身に於て畏怖すべきのある筈がない。一心供養と無畏とは語を別にして實を同じくし道を異にして到所を等しくするものである。衆生元是れ施無畏者に他ならぬといふ事になる。一心供養を勧めらるゝ釋尊の主意は茲にあることを徹見すべきである。

無盡意菩薩白佛言世尊我今當供養觀世音菩薩即解頸衆寶珠瓔珞價直百千兩金而以與之作是言仁者受此法施珍寶瓔珞時觀世音菩薩不肯受之無盡思復白觀世音菩薩言仁者感我等故受此瓔珞。

私註。

「寶珠」萬德莊嚴の寶珠であつて敢て物質上の珍寶珠玉とみ解するは當を得ず。瓔珞。總持法門の瓔珞の飾である。瓔珞經に初住は銅の瓔珞を以てし等覺のものに到つては摩尼珠の瓔珞を以てすとある。即ち今無盡意菩薩、その瓔珞を採りて之を供養せむとするの意は、法門位地の表示である。瓔珞を以てするのであるから、法門總持の大智恵を以て供養するの儀にとる

がよろしい。そして「値直百千兩金」といへるは無盡意菩薩は補所の大士であるから、その位の高きことをこの形容詞で以て表明したのである。「仁者」觀世音を唱んで仁者といふのは、その慈悲仁愛の權化であるから言つたので、無畏を施すが故に施無畏者といふが如し。「法施」布施波羅密の一で財施に對して法施といふ。布施は梵語で(Dana)檀那といふ。布は普て施は捨てあり散である。一切衆生を愛愍するが故に一切のものも普く惠施するので、財施は物質的に飲食衣服田宅珍寶を施すもので、法施は抽象的に諸佛及び善智識に從つて善法一切を聽聞し、淨心を以て他の爲に是を

解き施すことである。しかも施には三等がある、財寶布施は下等で、身布施は中等で、その上等は心に著執するところなきをいふと大智度論にある。釋氏要覽を見ると布施に就き詳細なる説明がしてある。科註法華には此法施に就きて法施以財通法也とある簡にして要を盡してゐる。してみると財施即法施といふ事になる。「不肯受之」之とは無盡意供養の法施珍寶瓔珞を指すので、觀音は敢てこの供養を受けない。人の供養の心地を汲む能はぬのであるか。この不受は觀世音の三昧力は廣大無邊にして受くべき所なきを表はしたものである。その慈悲は絶對的なるが故に供

私解。

養布施の要を見ないのであるとて、この一句は觀世音の慈悲本誓の眞面目を表示した緊要なる句である。釋尊の勸によりて無盡意菩薩は、その旨を受け、先づ命を奉じて、世尊に申すやう、「我先づ觀世音菩薩に供養し奉らん」とて、頸にかけたる寶珠珍寶の高貴なる瓔珞等を解き、觀世音菩薩の前にさしあき、仁者願くば、この施物を受け給へ」と。時に觀世音菩薩は、之を受くるを肯せず、無盡意菩薩重ねて觀世音菩薩に申すには、「仁者我等を慰みてこの布施を受け給へ」と。是を單に雲烟視すると、一場の布施の供養であるが、これを仔細に點檢すると、この一場の應酬の中にも法を説いてある。無

盡意菩薩が頸の寶珠瓔珞を解くといふ、一節は頸を中道一實の眞理を表すと見之を莊嚴するに無著の法門を以てするを珍寶の寶珞に比す。更に解くといふは諸法不染著の行を表明したもので、無盡意補所の菩薩であるが、今觀世音を供養するに當りては、中道一實の理にかけたる無著不住の寶珠をも捨て、唯是れ一心にして、萬行諸善の功德乃至菩提般若に到るまで悉く不住不著、敢て依倚せざるを言ひ表したものと認める。而も觀世音は、之を受けないといふのは、實は有難い仁者の志である。無所受の實體を露出して、如何が是を受むやと、仁者答ふるに、既に道を以てし法を施してゐ

る。そこで、無盡意は更に四衆の爲に仁の故に感みて是を受けよとは、無所受の所を以て之を受けよとの悟の境を言つたのである。この節に就きて主眼とする所は「解頸の衆珠瓔珞」である。その故は釋尊が供養をすゝめられたる、その效蹟を表するのが此の經の此節の文であるから。他に全體の上からみて且つ又主意の上から言へば「不肯受之」の所に此節の大眼目と大含善とがある。無所受の法を露出した所に主眼がある。

爾時佛告觀世音菩薩當感此無盡意菩薩及四衆天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等故受是瓔珞。

私註。

「四衆」四部衆又は四部弟子の略で、佛弟子をいふ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷是である。

私解。

その時に觀尊は觀世音菩薩に告て此の無盡意菩薩及び四衆八衆等の爲に故に、この瓔珞等の施物を受けよと。是は順序として、一は供養せむとし、一は之を辭すこの兩者の間は是非、一等級の者の仲介を勞するなればならず。釋尊自らこの任に當られたのである。佛が此の仲介の爲になしたる處は、菩薩は物の爲にするの故を以て施を受くべしといふのである。故に此の節の主眼は惑の一字に結着する。惑者に惑を以てするは酒を爭ふ者に酒を出すが如くである。更に釋

尊の眞意説法の妙趣を察すると無所受の法と更に無所受も亦無しといふ兩菩薩の境を超越して受なれば即ち受け施ならば施無受も無施も唯これ感憐の大慈悲に外ならないといふ處を暗示し觀音大士普門の慈悲心はもとより無所受の愛無所受の慈にして普編無量の測隱の權化であるが更に若し此の普編無量の慈愛ならば何ぞ普編無量の慈愛を以て物をうけざる菩薩の行は物の爲に施を受くるはその本義に悖らぬといふ。この點が本節の要である。そこで次は觀音はこの佛の勸めて受施するといふ段取になる。

即時觀世音菩薩愍諸四衆及於天龍人非人等受其瓏珞分作二

私註。

分作二分一分奉釋迦牟尼佛一分奉多寶佛塔。

「釋迦牟尼佛」梵語では Sakyanuni Buddha と綴り釋迦は

Sakya て印度 (India) Kapilavastu 地方に住した種族である。

牟尼 Muni は智者又は仙人の義で新しくは寂默と釋し、

智惠深遠の義釋迦を能仁と釋して慈悲廣大の義に採

る。故に釋迦牟尼とは慈悲と智惠との二徳を顯す語

と解釋する人がある。佛は Buddha て尊號であると俱

にその成道後の位から名づけた眞如悟入の域をも指

すのである。「多寶佛塔」多寶如來塔の略で多寶如來

とは鉢羅部多羅怛囊 (Prabhavarana) の釋である。此佛は、

證明佛として法華經中に出現して釋尊の説法を讚嘆

せられた。塔は梵語の Stupa で、卒塔婆といひ廟方墳又は大聚と譯する。十二因緣經には十二種の塔を説明してある。多寶塔といふのは、詳しくは多寶如來全身卒塔婆の義である。多寶佛は全身の舍利散失せず、一寶塔に收めて供養せられる。法華經見寶塔品に「此寶塔中如來全身」とある。(法華經見寶塔品參照せよ) 今、觀音がこの供養を直ちにこの佛の全身塔に捧げたのは、法華經中の一經である本普門品として必要であるのみならず、釋尊に對し又釋尊の説經を證成讃嘆した、多寶佛を供養して自己大慈本願の成就を證せむとしたのである。

私解。

釋尊の勸告を入れ、無盡意菩薩の願にも依り、茲に觀世音菩薩は、諸の四衆及び八衆等を感み、菩薩の本行を鑑み、無盡意の捧げた供養の瓔珞を受け、之を二分して一を本師大恩教師釋迦牟尼佛に、一を多寶佛に奉つた。茲に觀世音は、全く無盡意の志を受け、入れ且つ釋尊の説法をかしこみ、自己の願力を釋尊で以て説明せられた事に對し、自認し是を誓ひ、觀世音普門示現の本懷はこの如しとして、先づ無盡意の質問である、觀世音菩薩といふ名號と普門品といふ本經の經名で且つ本菩薩の活動の範圍効力及び觀世音大菩薩出世の目的を畢つたのである。尙ほ、此一未に於て、何故に二分し

二佛に奉つたかといふ、その文字上の意味を案ずるに、古人の説に依ると二分するは事理の二因を表し、二佛に奉るは、二因の二果に越くべきことを表したもので、理の圓滿は法身佛で多寶如來に配し、事の圓滿なるは報身佛で釋迦文佛に配すといふ説で頗る意を盡したものである。(科註法華參註)故に此の一段はその主眼受其瓔珞にあるが、結果としては分作二分の一句にあること言ふ迄もない。

無盡意觀世音菩薩有如是自在神力遊於娑婆世界。

私註。「神力」神通力の略。神變不可思議の力用で、神とは神異不測通とは無碍自在力とは修業禪定によりて感得

私解。

した天籟入神の用である。神通に六種あり、一天眼通、二天耳通、三他心通、四宿命通、五神境通、六漏盡通である。普門の説明に對してはこの節で以て畢る。即ち普門段の結文である。無盡意菩薩よ觀世音菩薩は上述の如き神變不思議の力を以つて、この娑婆世界に遊化するのてある。と、この一節の主眼は自在神力の一句にある。神力自在なるが故に、その普門は絶對的無量光である、盡十方無碍光である。そして有如是以下世界迄は普門徧全體に通ずる語句であることは勿論である。然し普門の用は觀世音といふこと相俟て完全なる菩薩の本行を遂行し得るのであるから、普門の原因

は觀世音にあり觀世音の發現が普門である。それ故觀世音菩薩の説明は觀世音と普門との兩方面から説明研究せなくてはならぬ。そこで本經は前後兩部に編別せられ是を説いたのである。即ち觀音編と普門編との二編に分ち今是を畢つたのである。これ先づ觀世音菩薩といふ現世主義慈悲佛の研究を明かにしたこととなつた。

(三) 偈文の編

爾時無盡意菩薩以偈問曰。
 世尊妙相具。我今重問彼。佛子何因緣。名爲觀世音。

具足妙相尊。偈答無盡意。汝聽觀音行。善應諸方所。
 弘誓深如海。歷劫不思議。侍多千億佛。發大清淨願。
 私註。「偈」偈陀又は偈頌の略。梵語 Chaitanya 偈陀といひ譯して頌といふ。元來は有韻の詩文で、四言五言或は七言で以て疊まれ、四句で一頌或は五六七句で一頌をなし是を連絡してゐる。梵文佛典には拾二種の文辭の様式があると言はれてゐるが、その中の一つは此の偈である。叱陀などにも矢張り此の偈の様式を備へてゐる經文がある。是は一は壯重なる文章上の様式であると共に、發聲上の都合にも依るものである。「我彼」我とは無盡意、彼とは觀世音である。「重」あるが上

に又積むるを重といふので既に無盡意菩薩は觀世音の名を得るの因縁と三業に遊化するの相とを問ひ畢つたが更に重ねて頌して問ふのである。「佛子」觀世音を指す。觀音行。「法華科註に觀音行即一心三觀智行令衆生得解脫也」とある。「諸方所」娑婆世界の義である。然盡十方觀音の應ぜざる所ない。「弘誓」四弘誓願であつて是は諸佛の通願である。衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。の四誓願がある。阿彌陀如來には四十八弘誓あり觀音には十八弘誓があるといはれてゐる。「歴劫」劫は梵語で劫波(カレバ)の略。大中小の劫あり小劫

私解。

は最小の劫の合集時間であるが、一劫と雖も尙ほ四方里の大石を輕き天人の羽衣にて三年毎に一度宛撫て之が磨滅する迄の間をいふ。長時間の意である。無盡時の意に採る場合がある。歴劫云云は願行は劫を経て多佛に値ひ初て淨願を發するのて無量劫來衆生濟度の爲に苦勞辛苦するといふ大慈悲心の基源を稱し讚したのである。

この以下の偈頌は隨朝閣那掘多達磨の譯であつて智者大師の時代には此の偈は未だ行はれてゐない。それ故彼の大師の名著觀音玄義記にこの偈以下が義記してないといふ説がある。科註法華經の著者の研究

に依ると荆溪和尚の輔行第八卷の中に此の偈にある
「還著於本人」の句が引用してあるから、宋朝頃にはあつ
たてあらかたというふて考證が載つてゐる。

以上

釋尊は觀音名の因縁及び普門の相を説き了られた。

その時に問者無盡意菩薩偈頌を以て問ふた。その偈の意味は
是から解釋する處である。先づ重問の故に更めて世尊佛陀の
徳相を歎美し我重ねて觀世音の義を尋ねむに觀世音菩薩は何
の因縁ありて觀世音と名づけかの妙相好を具有せるやと。世
尊亦長舌を振ひ偈を以て答へるに汝先づ觀音大慈大悲の行を
聽けよ彼れ觀世音は善く娑婆世界十方諸所の衆生の機に應じ
て弘く救苦せむとの誓願の深きは海の如くしかもその誓願た

るや劫を歴又千萬億の多佛に値つて練磨し研鑽してあるから、
大清淨の願である。その淨願十八を發して廣く衆生を度せむ
としてゐると。此の際特に偈を以て問ふに對し世尊亦偈を以
て答ふる物の響に應ずるが如き世尊應化の妙を思はねばなら
ぬ。そして是は唯文章上の綾飾のみでない事を承知せなくては
はならぬ。此の一段は矢張り觀音の名と普門の用との二問を
兼ねてある。故に答は二方に分れて名因縁、普門相の二となる。
汝聽以下は惣に觀音の行願を頌答せられたもので。説明的頌
の總根本である。慈悲普門觀世音名も俱にこの弘誓の海の如
き處に起源してゐるのである。

我爲汝略説。聞名及見身。心念不空過。能滅諸有苦。

私註。

「我汝」我は釋尊で汝は無盡意である。「名身」名は觀世音の名にして身はその示現たる三十三身である。「有」二十五有の有である。迷界の總括した名で四洲四惡趣六欲天梵天無想天那含天四禪天四無色天是である。四州は東弗婆提西瞿耶尼南閻浮提北鬱單越四惡趣は地獄餓鬼畜生修羅。六欲天は四王天忉利天夜摩天兜率天化樂天他化自在天。梵天は色界初禪天中にあり無想天は色界第四禪天にある那含天は小乘不還果證得の住する第四禪天の一部。四禪天は初禪二三四禪天。四無色天は空處識處無所有非非想處是にして是等諸界は因果相續して果中未來の果を結ぶ

私解。

べき因を具有するから有と稱するのである。是から釋尊の細説の頌に入るのて我れ汝の爲に略説せむとて觀音の名を聞きその現身を見心に觀音を信念すれば能く諸有の苦を滅すと。即ち説は口業見身は身業心念は意業である。この三業清淨なるが故に諸有の苦を滅するのである。觀世音の身口意はよく衆生の身口意と相應じ二生一體二心一心心融合し事理圓融して諸有の苦なるもの更になし。是は總答である。細説に就ての序説で全體の答に通じてゐる。

假使與害意。推落大火坑。念彼觀音力。火坑變成池。
或漂流巨海。龍魚諸鬼難。念彼觀音力。波浪不能沒。

或在須彌峰。爲人所推墮。念彼觀音力。如日虛空住。
 或被惡人逐。墮落金剛山。念彼觀音力。不能損一毛。
 或值怨賊繞。各執刀加害。念彼觀音力。咸即起慈心。
 或遭王難苦。臨刑欲壽終。念彼觀音力。刀尋段々壞。
 私解。〔須彌峰〕 Sumeru 蘇迷盧須彌樓といふ音寫で、印度古來

からの傳説には、宇宙は此の須彌山を中心として、周圍に七金山、八海等を有し、一切の生類之れに依りて生棲し、日月諸天亦是に依りて回轉するといふ説がある。之が須彌山説と言つて、宇宙説の根本一説である。上は直徑大で、中央はやや小、水面上八萬四千由旬、水面下同じ故に總高十六萬八千由旬、頂上は縱横共に八萬

由旬にて、帝釋天の居城であるといふ。俱舍論第十一世間品及び釋氏要覽に詳し。須彌の七金山といふのは、一踰健陀羅 (Yugandhara) 二伊沙駄羅 (Isadhara) 三羯地落迦 (Karasika) 四蘇達梨舍那 (Sudarshana) 五額濕縛羯拏 (Asvaka arna) 六毘那但迦 (Vinataka) 七尼民達羅 (Neminidhara) 是である。〔金剛山〕 金剛圍山の略て、或は鐵圍山或は又七金山ともいひ、須彌山の異稱ともいふ説がある。金剛は梵語て Vajra 即ち跋折羅といつて、金剛の堅きことは萬物もこれを破壊すること難く、金剛不壞と總稱し、譯して不壞とする。七金山説が頗る當を得てゐる。それは須彌は蘇迷樓て原語の上から言つても、須彌山説は受取

私解。

難い。若し七金山説であれば金剛界(Vajradhatu)といふ事は、この七金山を總稱して、全宇宙に代へた義となつて頗る要領が得られ易い。「王難」。七難の一に刀杖難ともいふ。「苦」。八災の第三であつて、八苦がある。一生苦。更に是を五別し、初出、至終、増長、出胎、種類とする。二、老苦、三、病苦。之に身病と心病とあり、四、死苦。之に又命盡死と外縁死とがある。以上を四苦と稱し更に五、怨憎會苦とて、三惡趣の苦みがある。六に愛別離苦とて人間天上の苦、七に求不得苦、八に五陰盛苦といつて前七苦の聚集した苦がある。(涅槃經に詳し)是から答の細説に亘るもので、七難を頌したのである。

害意を以て、大火の坑に推し落さしむるとも、彼の觀世音の神力を心念すれば、火坑は變じて池となるべし。(火難)或は大海に漂流して龍魚惡鬼の難に遭ふも、一度觀音力を念すれば、怒濤波浪と雖も没すること能はず。(水難)或は須彌山上から惡人の爲に推し墮されても、一度觀世音の方を念すれば、日の虚空に住するが如く、落死するが如きことなく。或は又金剛山上より墮落しても、觀世音の力を念すれば、一毛の微と雖も損傷することなし。怨賊の爲に刀を以て害を加へられむとしても、彼觀音力を念すれば、威く慈心を起し、危難を免るべく(賊難)或は又刀杖の難に遭つて、壽も將に終らむと

するに臨み彼の觀音の力を念ずれば刀は段々に壞れて、更に害を蒙ることなけむと。刀杖難

右は、念彼觀音力の效力に就きて前に述べたる所を復頌したのであるが、この各節につき、念彼觀音力といふ字句の多い事は何人も直に感得し、是がこの文の主眼である事を會得するであらう。是は前述の總答に於て心念不空過といつた事に相應したもので、全偈に就きての緊要なる句である。七難も八苦も唯此の念力に依りて免るゝといふ事は、實に物質上形而下の理論や、推定や乃至因縁話を基礎として、理窟を附けるのは普通の見界に映じたる凡觀で、若し少くも、新人的徹底的に是を觀察し、研究するならば、一は教理の純粹なる方面から、一は心理上の實

驗から、是の經卷の此の偈文に付き、決斷を下さねばならぬ。從來教義の講釋は頗る不徹底で、徒らに訓話の風習と極めて儂固なる信仰、寧ろ盲信から論ぜらるゝ傾があつた。新人は決して是で以て満足せない。底に徹し、腸に堪へ五感に訴へ更に清冷水の如き判斷と批評的眼光とで、以て然る後に徹底的に之を了解し、信仰するのである。この七難、離苦の事實らしき偈文を案ずるに、要は心念不空過の一句に歸着して、他は悉く之が形容詞に過ぎない。勿論、新人と雖も、不可思議の光明や理智以上の靈能の否認をするものではないが、本經の主旨は、然く現世の物質的利益にのみ止るものではない、否實に教學の上に大なる根底を奠いた大乘妙典として、哲學的の大理論を演説したものであ

ると觀且つ信ずるが故に、殊更に儂固なる舊觀を脱し度いのである。依つてこの事例につき例へば須彌難金剛難乃至火難水難の如き句を見るに表面一の奇術的所作であるが然し靜かに思ふに觀音菩薩といふ大乘菩薩の神力を心念するといふ事は之を心念して空過するなく凝つて一團の大信仰となり、三昧の融合的局所に到達したならば心身一個の法爾に現前して更に不動如如として時間的に空間的に永久無邊に變なく化なく滅なく増なく於茲火も燒く能はず水も亦没する能はず如何んか一毛の損するべきあらむ。須彌の頂上の坦なる事尚ほ平原一望限りなきの雪面の如くてあるべき筈であらねばならぬ。この點を儒教では事實に依りて大丈夫の心は威武も屈する能はず

富貴も淫する能はずと言ひ禪家では心頭滅却すれば火も亦冷しと喝破してある。その言その語その説は百岐百態されど一ヶの月明を賞する點に於て同じ高嶺に到ることは千古萬古東西南北決して異つてはならぬ。觀世音菩薩の力を念ずるといふこの主體と客體とが事理圓融して無碍一如となる時に七難果して何等の難を加へ得やう。肉はさけ骨は碎くることは免れ難い。然し是を以て難とし苦とするは淺見てあらねばならぬ。火變じて水となり山變じて河となること雀の海に入り蛤となるが如くてあつたら大變である。近世の科學の進歩が紙からパナマを作り木材から綿を造り出したり乃至鳥の眞似や海坊主の代理をして宇宙を馳け廻つたりするのは其の事實

の進歩が是を證明してゐるから言ひ様はないけれど、觀世音といふ過去の印度佛の力て刀は段々に壞れ、囚禁の枷櫛が釋けたりなどしたら、天下は眞闇で、賢人は竹林に遁れ、聖人は鱗に乗りて月宮殿に遁れ出すであらう。故に水は永久に冷かに、火は永久に燃えて熱く、萬丈の山より墮ちたら、千萬人共に頭盧は粉碎して畢ふに極つてゐる。唯この間に於て一念の觀音力といふ、永久不變偏無量の一物のみは如何に百千萬の手段を廻らしても、捕へ難く、燒き難く、刀も此一物には段々壞し、一毛も損ずべからず。毒藥乃至惡鬼惡蛇惡獸も爪も立ることを難しとする。海はあせ、山は裂けなむ、世が來ても、未來永劫、心念不空過の觀音力丈けは、若やぎの春の柳の如く、いつ迄も青く、彌生の空に馨る。

櫻の如く、永久に美しく、鐵金剛の堅きに比し、大火坑の炎々たるに比し、大海の漫々たるに比し、萬世不易の光明とし、護符となり、咒となるのである。この事實は何人も否定し得ない。若し否定したとすれば、是は必ず虚偽である。この一事は眞理である。世の事例に照らして見ても、手近く人間の生活思想の上、に對比して見ても、一念の凝つたる信仰上の一團は、如何なる害も害でなく、如何なる樂も樂でない。この一團の心念は、唯是れこの如くにして満足して不易不變の中に冥々として、永劫の生命を保つてゐる。物質の推移は猫の目の如くであるが、目といふもの乃至又質の力といふ者は、法爾自然に任せて、恒河數の處、恒河數の時を経て、變らない。花は年々に移り、人は月々に變

るが花に對し、月に對し、人に對する力、心等の極微の波動は萬代共に毫末の差はない。茲に到りて願て心念不空過の觀音力は如何いついつ迄も變る事なく、難遭の難も、苦繞の苦も、遂に何等の苦難でない。愛と戀とに心念不空過の人は、この觀音力に生きて地獄焦熱の中に、泰然と樂を求め、金に盲の守錢奴は、弗箱の前に春秋の快を知らず、如斯にして彼の觀音の力を念ずる者は、この力に生れ、力に育ち、力に死して、一物の容るゝ間もないのである。

或囚禁枷鎖。手足被桎械。念彼觀音力。釋然得解脫。
 咒詛諸毒藥。所欲害身者。念彼觀音力。還著於本人。
 或遇惡羅刹。毒龍諸鬼等。念彼觀音力。時悉不敢害。

若惡獸圍繞。利牙爪可怖。念彼觀音力。疾走無邊方。
 蚺蛇及蝮蝎。氣毒煙火然。念彼觀音力。尋聲自廻去。
 雲雷鼓掣電。降雹澍大雨。念彼觀音力。應時得消散。

私註。

私註。或は又手足を桎械せらるゝものも、觀音の力を念ぜば、釋然として解脫せしむる事を得べく、或は咒詛、或は毒藥を以て害せられ、身の危急に及ぶとき、彼の觀音の力を念ずれば、害者還つて自らその咒詛に斃れ、毒藥に苦むべく、或は羅刹毒龍惡鬼の爲に害せられむとするとき、彼の觀音の力を念ずれば、悉く害せらるゝことを免れむ。惡獸の利牙銳爪を磨くも、彼の觀音を念ぜば、是

等の惡獸も馳りて無邊の塚に去り、蛇蝎蜈蚣の如き惡毒の長虫も假令氣毒煙火の如くなるも、一度觀音を念ずるの聲をさかば、自ら廻り去り、雲雷はためき電光物凄く電を交へて降る雨大なるも、觀音の力を念ずる功德によりて、時に應じ消散すべきである。諸種の傳説は是等を裏書して、孝子節婦乃至信厚の人は常に此の名號を信ずる事によりて、諸危難を危れ、害者却つて自ら斃れるといふ不可思議の俚譚が多い。唯この一心一念の凝り固りたる場合には、人間の意識の外に出る、遂に天地に感じて、雲雷電雨も亦消散せしめ得るのである。天地と同一體の信域に到れば、この如きことは

自ら神得する處で、不思議でも何でもない。

衆生被困厄。無量苦逼身。觀音妙智力。能救世間苦。

私解。頌の一段を畢り、次に第二の頌として別に一段を爲してある。即ち答の一で、前の念彼力の一段に對して對等の位地にある句である。衆生困厄せられ、無量の苦に身心惱亂せらるゝとき、かの觀世音の妙智力は能く世間の苦を救ふ。依つて、無量苦逼身の一語を案ずるに、衆生は、界内の貪瞋邪見及び界外の三毒十惡を持し、外には報得の男女無く、更に定惠の法財に乏しい。かゝる結果は、當然生死二種に困厄せらるゝのである。この生死纏綿の苦は、衆生の身心に逼つて、及の如く鬼

の如くである。觀音は觀世音と普門の示現とを以て二種世間一切の苦厄を除かるゝのである。是は觀音の觀世音といふ處を述べた頌句である。

具足神通力。廣修智方便。十方諸國土。無刹不現身。

私註。是は觀世音示現を頌したものであつて形遊諸國土の種々形といふ前解の處を再移せる正頌である。念彼の段とは別に一の頌句をなしたものである。觀世音菩薩は神通不可思議の力を具有して廣く智惠の方便を修め、九方の諸國土に身を種々に示現し、衆生を救済すること限らないのである。智の方便といふ處に前に言ひ盡せなかつたが方便は是れ意業である事を説

明してゐる。

種々諸惡趣。地獄鬼畜生。生老病死苦。以漸悉令滅。

私註。「惡趣」惡き業趣にて趣は境遇、惡は壞善の義である。趣を道と解し、六界六趣を六惡道といふ人もある。就中地獄餓鬼畜生を三惡趣といふ。苦多く樂みなく、闘争に怨恨に餓に泣くの境遇である。種々の惡趣といふは、法華科註には、九界に通ずとある。即ち佛界に於ては惡業と名づくべきものなき樂境であるから、地獄から天上に到る、欲色の趣界、六道の回業に於てのみ惡趣といふものがあるのである。

私解。觀世音は身業普く一切の衆生に應じ、六惡四苦の境界

から救つて、その悪苦を悉く滅せしむといふ。惡趣滅すれば、唯一ヶの眞實の佛道あるのみ。惡趣を滅せしむるといふは、道を得せしむるといふ事である。

眞觀清淨觀。廣大智惠觀。悲觀及慈觀。常願常瞻仰。

私註。眞觀。眞は空の義にして、人道化主の眞觀である。清淨觀。眞は十一面修多羅道化主の觀て、清淨といふは、假觀である。假といふのは空より得て見思の愛染なく、即ち清淨といふ所以である。「廣大」。如意輪天道化主の觀である。廣大慈悲の觀は、天道を照らし、昭々として意の廻ること輪の人の引くに從つて廻るが如く、衆生苦惱の心に應じて慈悲を垂るゝのである。「智惠觀」

馬頭觀音の觀に當り、畜生道化主である。廣大智惠の觀は共にこれ中觀である。何故智惠廣大といふか。智惠(Prāṇa)の大なるものは、雙遮、雙照、無也、絶對に平等である。廣大智惠觀は平等を以て本性としてゐるのである。「悲觀」。千手地獄化主の觀に當る。悲といふは上の三觀を以て觀じて苦を悲み、拔苦與樂せしむ、その拔苦に就きて悲觀といふのである。「慈觀」。聖觀音、餓鬼道化主の觀て、三觀を用ゐて樂を與ふるを慈といふのである。以上の三觀及び慈並に悲觀の二觀を加へて五觀は悉く慈悲を本體としてゐる觀である。觀世音は、皆無縁の慈悲を以て衆生を視るのである。

私解。

眞觀等の五觀を常に修し常にこの觀を仰瞻せよといふので、是は觀音菩薩の意業に就きての頌である。觀世音の觀察の慈悲の方面及び内容を證明したものである。この頌の主眼は常の一字にあることは言ふ迄もない。常觀常念常仰の常は念不空過の一句にあり、常なるが故に觀音の觀は時間が普遍的である。常は時間的であるが、之に空間的觀を加へて絶對の慈悲の觀を成就するのである。

無垢清淨光。惠日破諸闇。能伏災風火。普明照世間。

私註。

「無垢」煩惱の垢穢なきこととて、一點淨瑠璃の形容を露出していふ語である。無垢は又白である生である「清

淨」正法を露出したる形を清淨といふ。東坡の悟詩

に溪聲即是廣長舌。山色豈非清淨身。「光」この光は無

碍光の光明の義である。物理學上の光とは所謂光學

上の本體で物體の形色位置方向等を識別せしむるも

のて、太陽又は光燈から發する直行する處の極微エー

テルの波動であるといふ。そして光の速度は極めて

大で、空氣中又は眞空中にては、凡そ三億秒米といはれ

てゐる。處が此光は物質固體に遭ふ時は、之を透過す

ることの出來ぬ場合が多く又之を透つても反射した

り曲折したりする。然るに智惠の光は、こんな煩い事

はなく如何なる物質をも透視する。眼光紙背に徹す

といふ語は未だ淺い。大智(Jāna)の光明は普く世間を照らすのである。「惠日」といふは、諸闇に對する日の如き慈悲の光明を指すので、正理の眞諦を盡したる光明はよく、三毒煩惱の闇を照破するのである。

私解。

觀世音の無垢清淨の智光は、正理中道を照らし究はめ、彼の本源實相を察し、三毒の諸暗生老病死の火災煩惱百八の大風を伏せつくして、普く世間一切の衆生に智惠解脱の光明を照らすのである。この光明若し諸惡毒を破らざれば、何て能く二種世間の機を益し得やう、故に此の節の主眼は、破の一字に歸すると見るべきである。

悲體戒雷震。慈意妙大雲。樹甘露法雨。滅除煩惱焰。

私註。「悲體」悲は身輪を表す。「慈意」慈は意輪を示す。此

の二輪は共に化の本源を爲すのである。悲なるが故に衆生の諸苦を抜き、示現無利の應化をなし、慈なるが故に説法教化して樂を興へ、法性を體得せしめ、無畏の大樂域に到らしむるのである。「甘露」天台智者の解釋によると、この甘露といふのは、諸天不死の神薬である。奏の始皇桃を喰つて不死を祈り、日東に使を派して不二山下の美國に不死の仙薬を求めしめたといふ。惜ひらくは此の甘露を知らざること。觀音を信念する處、甘露のなきなし。至理を窮め、法理を盡し、

觀音慈眼の光明を認めたらば海波千里を使する愚者もなからむに不生の處不死なきを知らざることは悲むべきである。觀世音何故に彼の始皇の煩惱の苦聲を聴き、その志を觀じ、甘露雨一滴を降らしめなかつたのか。

私解。

この段は初二句の化導に本源を示し、後の二句は説法利益を表したものである。觀世音の悲體は雷の如くに震ひ、慈の意は大雲の如く直ちに慈悲凝つて不死の甘露雨を澍らして衆生の煩惱の焰を消滅すと。美辭を連ねたる讚美の讚頌である。悲體は法身である。此の法身は先づ戒法の威徳を用ゐて以て人を警する

は、天の雷を震はせ物の肅整ならざるものを正すが如くである。觀世音の拔苦の悲體は人を誠して正しくせしむるので、人道根本の初門である。慈悲の大雲といふは、大雲は無縁にして物を蔽ふて餘すところなきに比したのである。身意の二輪既に授くべき法雨の先馳として衆生を導きてゐる。ここに於て不死の甘露雨沛然として到る。衆生既に甘露雨に溶すれば受苦三惑の焰、惡毒煩惱の猛火も消滅せざるを得ぬのである。

諍訟經官處。怖畏軍陣中。念彼觀音力。衆怨悉退散。
私解。今茲に到りて別に、この如き事例を頌したるは頗る奇

異の感を催するけれど實は前節の説明として別に觀音普門示現の例證を擧げたのに過ぎぬ。怨恨をうけ、諍訟して官處に到り、或は軍陣中に命をかけて争ふも、一度觀音の力を念ずれば衆怨退散せむと。案ずるに、觀音慈悲の顯機を頌したものである。

妙音觀世音。梵音海汐音。勝彼世間音。是故須常念。

私註。「妙音」衆生稱習の雜音も菩薩の妙智を以て觀すれば妙音となる。木石の音叫鳴の音悉く菩薩の妙境から見ると妙音である。溪聲も亦法身の淨音であると蘇文豪の詩は徹底した妙韻である。空有を雙遮すれば、即ち妙境妙音が生ずるのである。「觀世音」空有を雙

私解。

照すると無爲有爲の二世間音となる妙音觀世音は共に中智の境界である。「梵音」出俗の眞音を指す。若し慈悲喜捨の四を以て此の音を觀すれば俗諦となる。「海汐音」俗にありて機を照らし、或は熟するあり、或は脱するあり、時節に差はずひく音をいふ。この梵音海汐音の二音は假智の音境である。「勝彼云々」畢竟空の智の九界の情を出て、衆生を照らす音であつて、世間に超えた音である。空智の境音である。觀の智は唯一心にあり、智の外に音のあるなく音の外に智のあるなし。かくて智境冥々として思慮頓に忘じ唯一の音唯一の智唯一の境悉の法を示現するので

ある。故に常に觀世音菩薩を念ぜよと。依つて案するに、音聲といふは、衆生の口業で、南無觀世音大菩薩と口稱する所である。然し、この口業がよく彼の觀世音菩薩の三智と合し、衆生の三諦を照らし、觀音と衆生と融合して、眞個の救濟せられ、救濟者被救濟者共に無垢の智惠海に遊ぶのである。故に觀世音を常念せよといふのである。

念々勿生疑。觀世音淨聖。於苦惱死厄。能爲依依怙。

私註。「念々」相談して正念を失せざるの義である。かの觀

世音の妙智を念々に相談して失せざることである。

「疑」疑は人間にあり、天には偽なきものと言つて、田

子の漁子、白龍を赤面せしめた疑は、謠曲羽衣の一節であるが、人を疑ひ、物を疑ふは下疑である。法を疑ひ、教を疑ふは上疑である。「大疑の下に大悟あり」と古人が言つてゐる。疑を起し、益々精進して眞理を追窮するは、やがて大悟徹底の根本である。然し疑の本體を心理的に見ると、記憶及び想像の聯合から、不正確なる判斷に到る間の程であつて、その内容は想像といふ極めて不正確な意識から出て種々なる比較乃至知覺的の判斷でなくて、單に記憶といふ過去の意識を追憶して、事物に對し、否定と肯定との二種の結着點を合ひて、觀察する心理状態である。故に疑は二種のもの、を同時

に容れたる不合理な精神状態であるから迷の根本である。不信は疑によりて生じ信は道元功德の本であるといふ遺教經の句に準じて疑を言へば疑は煩惱流轉の根本であると言ふべきである。

私解。

是は感應を明かにして疑を解しむるの頌である。上の頌では境智を擧げて次に常念を勧め、ここには先づ疑ふ勿れとさとして次に感應を陳べてゐる。疑を滅せざれば念々に觀世音の妙智を靈應すること能はぬ。疑あらば常念に名號を稱すと雖も未だ遷流することを得ず。遷流に於ては境智の深妙なる智光を感得することが出来ぬ。正念にして觀世音菩薩の境智

を念じ相續して失はざれば觀音身を離れず心を離れず口を離れずこゝに於て苦惱死厄の爲によく依怙となり給ふのである。天台智者大師註して「實心契實境、實緣次第生實實迭相注自然入實理」と。然るに實縁といふ者は刹那の念である。故にその他の間更に他の疑を生ずるなきを保し難し。若しこの疑起らば理念亂れ實理に入ることが出来なくなる。唯觀世音淨聖を信じて疑のない事が緊心である。念々の持誦、念々の信心々の勿疑茲に初めて一切衆生の依怙となり真理の實體を體限せらるゝのである。感應は冥々として測り難きも明かに疑なき時は必らずその應化ある

べきである。

具一切功德。慈眼視衆生。福聚海無量。是故應頂禮。

私註。「具一切云々」觀世音は多億の佛に値遇して無邊の大

願を成就し多却の時を歴て淨願を作り更に滿行の諸善徳を具して滿徳を圓滿に成し遂げた佛である。故に一切の功徳を具すといふのである。「海無量」海の水を容れて無量餘すなきに比していふのである。觀音の衆生に福を與ふる樂を願つこと無量無邊その限りなきを稱す。「頂禮」圓覺經疏によると「以已最勝之頂禮佛最卑之是敬之至也」とある。印度古代の最敬禮法て五體投地五輪著地といふことに同じ。宗教に

は、洋の東西を分たず敬禮の方法の最勝を頂禮となす。ローマ法王ヨロラ十世の前に、ゼルマン王が足を禮して罪を謝したといふ、史上の有名人話がある。支那でも周禮に稽首とあるが、之は長者の前に俯して頭頂を以てその人の足下を拜するのである。

私註。

觀世音は一切の功徳を具し慈悲の眼を以て普く一切の衆生を視福を聚集すること海の無量なる如くてある。故に觀音を頂禮供養せよと。一切の功徳を具するが故に、一切の衆生に感應し得るので福聚無量の故に、よく滿福を一切に施し得るのである。此の節は供養をすゝめ禮拜すべきを願したものであるが實は觀

世音を讚歎した頌であつて、偈答の結末である。一切
と衆生と頂禮との三句を以て、觀音の本體及び示現の
利益并に衆生臨機の智それから衆生と觀音との關係
を述べ盡したのである。

再時持地菩薩即從座起前白佛言世尊若有衆生聞是觀世音菩
薩梵自在之業普門示現神通力者當智是人功德不少。

私註。「持地」地藏菩薩(Ksitigarbha)の法門眷屬に九菩薩ある中
その第七の名である。大慈大悲のよく衆生を攝持す
ること尙ほ大地のよ、よく一切を持するが如きもので
あるといふ喩から地藏の徳を顯はして此の名をつけ
たのである。この地藏菩薩は無佛の世に於て救濟攝

化を釋尊から付囑せられた菩薩で、本地は閻魔(Yama)て
阿彌陀(Amitayus)と同様に閻魔の忿怒の反面である。慈
悲の權化であるとしてある。この菩薩は身を六道に
現じ衆生を救濟するから觀世音菩薩といふ現世佛空
間的菩薩に就き同感して、こゝに大衆の中から起立し
て歎美したのである。或る學者研究して、この經の初
めは無盡意菩薩の問で以て初め乍ら偈末に到り何等
此經に關係なき持地菩薩を出して讚美せしめたのは、
頗る怪むべき事、天台智者大師の玄義記に偈品の玄
義なきは此問の事情を語るものであるまいか、といふ
者がある。然し私に案ずるに、今釋尊の説法の末に到

り、持地菩薩が出現して、觀世音を讚美した事は同じ現世的佛として同じ衆生能化の菩薩として大に共鳴し、止まむとしても止む能はざる讚歎の情から起つたものである事を感得せねば、本經の主旨を没却して學ぶ。殊に佛經に於て初問者とその結末に於ける讚美結願者とは異なる場合が多い例へば法華陀羅尼經を見ても、最初に立ちて法華受誦の功德を問ふたものは藥王菩薩であつた。そして結願のものは全然別箇のものである。それ故初問者と結願者とは異つてゐるからとか乃至古註がないからと言つて、偈文以下を疑ふなどいふのは、智光の照蒙に浴くせぬものと言はねばならぬ。

私解。

らぬ。

かく釋尊が偈を以て無盡意の偈問に答へられた時衆中の地藏菩薩感に堪えず、座より起ちて佛に申すやう。「世尊、若し衆生ありて、この觀世音菩薩の觀世自在の智光普門示現の神通力を聞き、常念にこの觀世音を信ぜば、この人の功德は少からざるべし」と。蓋し、持地菩薩は觀音を信じ、「功德不少」と將來に亘りて讚美せられたのである。

佛説是普門品時衆中八萬四千衆生皆發無等々阿耨多羅三藐三菩提心。

私註。「普門」普とは普遍的又は周偏の義で、空問的の意味で

ある。諸法無量であるから、普あらずば、悉く諸法を容るゝ能はぬのである。即ち圓法で、二諦を照らしてゐる。門といふは空門假門中門で、今の門は實相に通ずるの門で、内通門である。觀世音菩薩圓融無碍の妙觀を以て、一切世間の苦惱を觀じ、佛機の音聲を察し、普く圓通の門に入らしむる故に普門といふのである。若し段の上から言ふと、前段では觀世音の向來の冥益を持地菩薩が保證し、讚美したのであるが、こゝでは普門の一品を示して、顯益の一段を説き示したのである。「衆中」聽衆一切の義ではあるが、裡には心身衆生の全體を表してゐる。「八萬云々」

この八萬四千の衆生といふは、心中八萬四千の塵勞を指したのである。故に八萬四千衆生は又八萬四千の門の義に採つてもよい。八萬四千門は、貪欲、瞋恚、愚痴と及び是等三毒の等分とを根本として、各二萬一千の煩惱あるを以て、合して八萬四千の煩惱と成す。衆生煩惱の多種多類なることを形容したものである。是を滅する爲に釋尊は八萬四千の法門を説かれたといつて、正否の兩門を對比してゐるのである。「無等々」佛は無上の故に無等々といふ。二乗は假令三界を出ずるとも、猶ほ二十の法門に纏綿してゐるから、無等とは言へない。佛は極地であるから、等にすべきものがないのである。今、ここに無等々といふは、佛心を發し求めたから、かくはいふのである。科註法華に

般若經をひき「發心畢竟二不別如是二心前心難今發初心等後心故言無等故言無等等於後心名無等等即四悉檀意明發心也」とある。「阿耨多羅云々」梵語では (Anutara-samyak-sambhi) て單に菩提といふ事もある。三藐は正三は遍菩提は智の義である。正遍智と譯される。一切の法性を識了する。智智の義である。大智度論に「云何正遍知。答曰知苦如苦相知集如集相知滋如滅相知道如道相」とある。即ちこの語は佛智を正覺して不生不滅の眞理を證悟し道の至極に到達することである。「發心」法華科註に發心の三種を擧げてゐる。一は名字の發心て即ち五品の弟子である。二は相似の發心て六根清淨の故に發心するのである三は分眞の發心とて初住以上の眞の發心といふのである。

畢竟するに菩提を永むるの心を發することである。

私解。是の一段て以て普門品全卷を了る。その主意は釋尊所説の觀音普門品に於て衆生悉く觀音の名を聞きて利益を得たといふ事を述べて結末としたので本經所説の目的が能く成就せられた所に於て説法を止め經を了つたのである。

釋尊この觀世音菩薩普門品を説き給ふとき衆中の八萬四千悉く皆無上菩提の心を發し、一は釋尊利導の旨に適ひ、一は觀音の名號を聞くことに依りて無價の大利益を蒙り等しく不生不滅の法性を識達し不苦の世界に安住した。といふのである。是の段は前段の爾時持地菩薩の一段に對して説法當時の狀

態を説きて、觀音名號の利益、普門示現、觀世音の化導の實際を記述したもので、持地菩薩が將來を證し、約し且つ讚美したことに、關し更に立證をして本説法を了るのである。

(九) 結 論

觀音菩薩の本性から示現、それから日本國民と觀世音菩薩の關係を説き、更に觀音經普門品を通解して吾人は茲に、その筆を擱むとするのである。

擱筆に當り、觀音菩薩といふ菩薩は徹底した愛の神であることを深く感じた。徹底した愛といふものは、愛それ自身を全生命とし、この外に何等の欲求のない無我の愛である。慈悲の本

質である。若し觀世音菩薩にして無我の大慈悲でなかつたらば如何。蓋し思半ばに過ぎるものがある。無始劫來、唯救衆生苦の爲に自己の成佛すら打忘れてゐる觀音の愛を無我の愛と言はなくて何と言はふ。自己の饑餓を忘れて他人に一片のパンを施す者があつたらば、それは觀音の示現である。次に觀音經を講了して釋尊説法の巧妙を今更らに感歎したのである。何ぞ感歎するの甚しきやと却つて笑ひ愚を嘲る者もあらう。然し幾何言つても、實に絶對の妙である。絶對の巧である。南無本師釋迦如來。南無大慈悲母廣大靈感觀世音菩薩。

日本國民と觀音菩薩及觀音經 終

附 録

觀世音菩薩の本説を記述せる經典に關し冥應集と稱する論集に於て蓮體法師(靈雲寺淨嚴の高足)が擧げたるものを更に轉載して觀音菩薩を研究せんとする人の參考に資するも亦本書の任務なりと信ず。

(一) 顯教の部。

- (一) 悲華經
- (二) 觀音受記經
- (三) 妙法蓮華經
- (四) 觀無量壽經
- (五) 無量壽經
- (六) 大無量壽經
- (七) 阿彌陀經
- (八) 無量清淨平等覺經
- (九) 觀音懺悔經
- (十) 大寶積經

以上十部は現在流布の藏經也。

(一)觀世音菩薩行法經 (二)觀世音觀經 (三)觀世音菩薩受記經
 (四)觀世音成佛經 (五)觀世音三昧經 (六)高王觀世音經 (七)觀
 世音十大願經 (八)大乘蓮華馬頭羅刹經 (九)觀世音詠託生經
 (十)須彌四域經 (十一)新觀世音經 (十二)日藏觀世音經 (十三)
 觀世音施珠寶經 (十四)觀音無畏論 (十五)觀世音三昧經。
 以上十五部の内、高王觀音經は世間に寫本にて流布のもの
 あり。著者の秘藏寫本中に、高王白衣觀音經と稱するもの
 あり。其他顯教に囑し、開元錄に記載せらるゝのみにして、
 現今日本に流布版行せられず、一二の古寫本にして、是の上
 に記せるものより外のものあり。然し以上の十五部は黃
 檠藏經に載せず、多く世にも持誦せられざるものなり。(五)

と(十五)とは同名なれど、其内容を異にせるにや、冥應集に舉
 げたれば記し、ちき、後日の參考研究に待つべし。

(二) 密經之部。

(一)大日經 (二)同經疏 (三)胎藏廣大儀軌 (四)金剛頂經 (五)略
 出念誦經 (六)十八會指揮 (七)分別聖位經 (八)三十七尊出生
 義 (九)瑜祇經 (十)理趣釋經 (十一)陀羅尼集經 (十二)金光明
 最勝王經 (十四)大佛頂首楞嚴經 (十四)大乘八大曼荼羅經
 (十五)佛說八大菩薩經 (十六)八大菩薩曼荼羅經 (十七)八菩薩
 四弘誓呪經 (十八)八名普密陀羅尼經 (十九)瑜伽大教王經
 (二十)佛教王經 (二十一)秘密三昧大教王經 (二十二)最上秘
 密大教經(二十三)無二平等大教王經(二十四)觀世音菩薩秘密神

呪經 (二十五) 瑜伽蓮華部念誦法 (二十六) 大集須彌藏經 (二十六) 種々雜呪經 (二十七) 呪五種經 (二十八) 觀自在菩薩三世最勝心明王經 (二十九) 方廣儀軌觀自在菩薩三世最勝心明王經 (三十) 降三世 會觀自在菩薩自心陀羅尼經 (三十一) 大教王聖觀自在菩薩念誦儀軌經 (三十二) 觀自在大恐成就瑜伽蓮華部念誦法門 (三十三) 消陸一切閃電障難隨求如意陀羅尼經 (三十四) 一佛說如意摩尼陀羅尼經 (三十五) 千轉陀羅尼觀世音菩薩呪經 (三十六) 佛說七俱胝佛母心大準提陀羅尼經 (三十七) 佛說持明佛母準提大明陀羅尼經 (三十八) 七俱胝佛母所說準提陀羅尼經 (三十九) 佛說持明藏瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經 (四十) 清淨世音菩薩普賢陀羅尼經 (四十一) 聖自在菩

薩一百八名經 (四十二) 聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌 (四十三) 觀世音陀羅尼經 (四十四) 佛說聖觀自在菩薩梵讚 (四十五) 讚觀世音薩頌 (四十六) 大梵天經觀世音擇地法 (四十七) 觀世音厨切位粒法 (四十八) 觀自在菩薩一印念誦法 (四十九) 觀自在菩薩 (五十) 賢陀羅尼經 (五十一) 觀自在菩薩母陀羅尼經 (五十二) 觀自在菩薩修習三摩地法 (五十三) 母修羅觀自在菩薩隨心法 (五十四) 馬頭觀音陀羅尼 (五十五) 千眼千臂觀世音陀羅神呪經 (五十六) 千手手眼觀世音菩薩姆陀羅尼身經 (五十七) 千眼觀世音 大圓無礙大悲心陀羅尼經 (五十八) 大悲心陀羅尼修行念誦略儀 (五十九) 十一面神呪心經 (六十) 不空羼素神變真言經佛說不空羼素呪經不素呪心經 (六十一) 不空

絹索神呪心經 (六十二) 親自在菩薩如意輪念誦儀軌 (六十三)
觀自在菩薩如意心陀羅尼經 (六十四) 觀世音菩薩無障礙如意
輪陀羅尼藏義經 (六十五) 觀自在如意輪瑜伽法要 (六十六) 如
意輪觀門義法秘訣 (六十七) 阿利多羅阿魯刀經 (六十七) 佛說
大方廣曼殊室利經觀自在多羅菩薩軌經 (六十八) 蓮華部多利
菩薩念誦法 (六十九) 佛說聖多羅菩薩經 (七十) 金剛頂瑜伽千
手千眼觀自在菩薩修行儀軌經 (七十一) 十一面觀自在心密言
念誦儀軌經 (七十二) 佛說十一面觀世音神呪經 (七十三) 不空
絹索心呪王經 (七十四) 不空索陀羅尼經 (七十四) 聖觀自在菩
薩如意輪瑜伽念誦法 (七十五) 觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經
(七十六) 如意輪陀羅尼經 (七十七) 如意輪要略法 (七十八) 都來

如意輪瑜伽法 (七十九) 佛說如意輪蓮華心如來修行觀門儀
(八十) 觀世音多利心呪經 (八十一) 讚揚多菩薩一百八名經 (八
十二) 聖多羅菩薩梵語 (八十三) 觀自在菩薩多羅菩薩念誦法
(八十四) 聖多羅菩薩一百名陀羅尼經 (八十五) 請觀世音菩薩消
伏毒害陀羅尼經 (八十六) 六字陀羅尼經 (八十七) 六字呪玉
經 (八十八) 六字神呪王經 (八十九) 六字神呪經 (九十) 字法
(九十一) 華衣觀自在菩薩經 (九十二) 佛說 髻尊陀羅尼經 (九
十三) 比俱低菩薩一百八名經 (九十四) 佛說栴檀香身菩薩羅尼
經 (九十五) 香王菩薩陀羅尼呪經 (九十六) 金剛頂青頸大悲王
觀自在念誦儀軌。
以上九十六部。

右兩部を合して實に一百二十一部の多きに達せり。是等が
 全卷悉く觀世音菩薩の本説といふにあらざれど卷中此の菩薩
 の本行其他凡ゆる此の菩薩の事跡乃至因縁より歸敬禮讚の次
 第法式まで記さざるなし。觀世音菩薩を研究せんとするもの
 は是非是等の諸卷を披閱せざる可からず。

最近諸種の觀音研究及び觀音經の講義等出版せられ其煩指
 を屈するものうし。然れ共古來天台智者大師の著作たる觀
 音玄義を以て第一と推す。されどこれには普門品の前半即ち
 本文のみを解釋せるものにして後半即ち偈文の段に到りては
 之を空除せり蓋し此の偈文は後來他の梵文に從つて添加せる
 ものなることの証左として認むるを得べし。前文と後偈とは

内容は異らざれどその觀音利益の箇條を列舉せばや、趣きを
 異にせる點なしとせず本書の本文に於て就て見るべし。要之
 觀音經の講義は玄義に如くはなし。されどそは大師の一の哲
 學の見解なれば淺學を以ては解し難し。近來各種講義あれど
 多く此玄義に基けり然も虎に似せんとして猫に誤るもの比比
 然り注意せざるべからず。斯いふ所以は實に他の講義を見る
 もの必らず此玄義を見るべきことを注意せん婆心也。

附 録 終

大正七年五月十五日印刷
大正七年五月十八日發行

日本國民と觀世音菩薩及觀音經奥附

定價金九拾錢

著作者

醍醐惠端

東京市日本橋區大傳馬鹽町拾八番地

發行者兼
印刷者

松崎善太郎

東京市神田區中猿樂町拾七番地

印刷所

中外印刷株式會社



發行所

東京市日本橋區大傳馬鹽町拾八番地
電話神田一四〇七〇六番
振替口座東京一〇七〇八番

明誠館

325
287

終